国立国語研究所学術情報リポジトリ

Yes-no questions and wh-questions in the Tsugaru Japanese dialect

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-03-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 沢木, 幹栄, SAWAKI, Motoei
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001087

国立国語研究所報告79　研究報告集 5 (1984)

津軽方言における単純疑問と疑問詞疑問

沢　木　幹　栄

1.　はじめに

青森県の金木町と弘前市に単純疑問と疑問詞疑問の区別があることが調査の結果，判明したので報告したい。同様の現象は日本のいくつかの地点の方言に存在するとされているが，津軽方言についてはまだその存在が報告されていないと思われるからである[1]。

2.　金木町の例

1977年の秋に青森県北津軽郡金木町において「表現法の全国調査のための準備調査」を行っていた際[2]，疑問文が次のような形式をとることがわかった。(インフォーマントは明治43年生れの葛西武男氏。以下，ka 氏と略称する。)

are dae̤ daba[3] (あれは誰か)

are heNhe : dana (あれは先生か)

文末に daba と dana (あるいは ba と na)

という二つの形式が現れている。この二つの形式のあいだで用法の分担が行なわれているらしいことは，「表現法の全国調査のための準備調査票」に従って調査を行うにつれ段々わかってきた。以下にそれらの例を示す。なお，数字は調査票の項目番号である。

083　egɯn dana (今度の旅行に) 行くか

088　egɯn dana (本当にそんなに大勢) 行くのか

196　enï erɯna　家にいるか

197　koᵗtʃa kɯrɯna　こっちに来るか

199　kaguna（手紙を書くか）

085　dogotʃa egudaba　どこに行くのか

201　joNderaba（何を）読んでいるか

204　naNsanotte ki̥taba　何に乗ってきたか

207　norɯba　（何時に）寝るか

ここまでで，ba（あるいは daba）が疑問詞（dogo，nan など）と共起することと na が疑問詞のない文に現われてその文が疑問文であることを示すことがわかった，しかし，ba が疑問詞のない疑問文（単純疑問文）に現われることはないのか。また，その逆に na が疑問詞のある疑問文（疑問詞疑問文）に現われないかは，まだはっきりしていない。

そこで金木町在住のもうひとりのインフォーマント，一戸哲三氏（1920年生れ。以下 I 氏と略称）にもう少しくわしく聞くことにした。

まず，前記調査票の疑問表現に関する項目を聞いてみた。以下にその結果の一部を示す。

単純疑問

083　ẹguna　（前出）

088　joge ẹgɯẹdana　（前出。joge は「大勢」の意）

090　arẹa seNse：dana　あれは先生か

196　ẹnï ẹrɯna　家にいるか　ここに来るか

202　radzɯo kïgɯ ga　ラジオを聞くか

　　radzɯo kïgɯna

203　pan kɯ·na　パンを食うか

疑問詞疑問

805　dosa ẹgɯẹ daba　前出

089	area daedaba	あれは誰か
201	nanï joNderaba	前出
204	nansa notte kïtaba	前出
207	e˜dzɯ̈ nereba	いつ寝るか

以上のように ka 氏とよく似た結果が得られた。ところで，085. 088 と egɯe は egɯ（行く）に e がついた形であろう。この e は東京などで「行くかい」と言うときの「い」と関係があるものと思われる。207 の nereba はもとは nerɯeba だったののだろう。I 氏によれば，「誰が行くか」という意味で da egeba と da egɯba の二通りの言い方があるが，この二つの中では egeba のほうが古いとのことであった。

調査票だけでは，ほかの疑問詞をともなった疑問文がどうなっているかはわからないので，こちらで疑問文をいくつか用意し，それを氏に方言訳していただいた。そのときに，文末に na を使ってもいいかどうかも聞くことにした。以下にその結果を示す。＜　＞内は I 氏のコメントである。

いつ来たか	edzɯ kïtaeba
	edzɯ kïtaga
	＜～ kïtana は不可＞
どうして来たか	dosɯte kïtaba
	＜～ kïtana は不可＞
具合はどうか	a˜bɛ do^{n}naba
	＜～ do^{n}nana は不可＞
どっちを読むか	dodzɯ joɯeba
	dodzɯ jomɯa
	＜～ jomuna 普通は使わない＞

このように「いつ」「どうして」「どう」（donna は「どんな」に対応か）

「どっち」に当たる疑問詞を使った疑問文のときは ba または ga が文末に現われ，na は用いられないということがわかる。

ここで ga についても一言のべておきたい。ga は東京方言などの疑問を表わす終助詞カに意味上も語形上も対応するものだが，金木町では単純疑問と疑問詞疑問の別なく用いられるようである。それは I 氏の 202，203 の答えを見てもわかる。

また，文末に ba のついた文が得られた項目（疑問詞疑問）について na を代わりに使えるかどうか質問した（項目番号 087，089，198，204）が，na を用いることは不可という回答だった。逆に，項目番号909，196，197，200，201，203（単純疑問）の項目について ba を用いることができるかどうか質問したが，これも不可ということであった。

結論として，金木町では na は単純疑問のみに用い（禁止の na もあるがこれはイントネーションが異なるので区別される），ba は疑問詞疑問のみに用いることがわかった。疑問を表わす形式はほかにもあるが，単純疑問かどうかによって使い分けられたりすることはないようである。また，daba は断定を表わす da にがついたものであろう。

3. 弘前市の例

弘前市では金木町と同様の現象が予想されたので，近藤健蔵氏（1922年生れ，ko 氏と略す）をインフォーマントとして調査を行うことにした。以下にその結果を示す。

単純疑問

083 ẹgɯna

ẹgɯga　（より丁寧な形）

ẹgï sɯga（目上の人に対して）

088 ẹgɯndaga

ẹgɯnoga

090 ano çito: seNse: na

~ seNse: dana

~ seNse: ga

196 ene̤ erɯ (ga)

~ erɯna

~ erɯndana

ene̤ es̤ɯ̤ga (ちょっと丁寧な言い方)

<erɯba とは言わない>

197 kogosa kɯrɯ

~ kɯrɯna

~ kɯrɯga

202 kïgɯga <自分の妻に>

kïgïs̤ɯ̤ga <ちょっと丁寧>

203 taberɯga <自分の妻に>

taberɯna < 〃 >

tabesɯga <丁寧な言い方>

疑問詞疑問

085 dogosa egɯ

~ egïs̤ɯ̤ <丁寧な言い方>

~ egïs̤ɯ̤ba <丁寧。念を押す言い方>

<egïs̤ɯ̤na とは言わない>

089 are daredaba

<~ darena, ~ darega とは言わない>

201 nanï jonderɯno

~ joNderɯndaba

~ joNderɯba

<joNderɯna, joNderɯga は使わない>

207 NaNdʒi nï ne̤rɯba

以上のように ba と na の使い分けがはっきりしている。ここで注目すべきは ga の使い方で金木町では ga は単純疑問，疑問詞疑問のどちらにも用いられたのに，ko 氏の方言では ga は単純疑問にしか用いられない。

4. 結　び

以上のような結果から，金木町と弘前市において疑問詞疑問と単純疑問が区別され，ba と na が文末において相補的な現われ方をすることがわかった。

今後に残された課題は ba と na の用法を徹底的に調べることと，疑問表現にどのような類型がありうるかを調べつくすことであろう。

今のところ ba，na が他方言のどの形式に対応するかはよくわからない。疑問詞疑問と単純疑問の区別を持つ他の方言とも直接対応させることはできないようである。恐らく，ba と na による両疑問表現の区別は金木町と弘前市において他方言とは独立に生じたものであろう[4]。

1）『弘前語彙』（松本明著，1982年弘前語彙刊行会発行）の「ば」（365ページ）と「な」（327ページ）の例文からも区別があるらしいことはわかるが，この区別に関して明示的には書かれていないようである。

2）昭和52年度の科学研究費「表現法の全国的研究」による。

3）以下，語形は音声表記とする。daba は ~da ~ba のように入りわたり鼻音がはいることはないようだ。

4）この区別は例えば英語ではイントネーションによってなされており，独立に生じてもおかしくはない。なお東京方言でも「どこに行くのだ」は可能でも，「行くのだ」をイントネーションを変えて疑問文にすることはできない。（「どこに行く」「行く」はともに疑問文として使える）

このように東京方言でもごく限られた範囲では一種の区別がされている。工藤浩氏よりこれは「だ」の性質によるとの示唆があったが，理由はどうあれ興味ぶかい事実ではある。